

青葉公園は市民の宝

今野善行

千歳の自然保護協会副会長

青葉公園に関わって

昭和二十九年四月頃と記憶していますが、千歳時計組合では、青葉公園が作られた記念に公園の入り口である本町から今の百年記念塔まで、道の両側に桜の木を植える事にしたのです。時計店に勤務していた私は他の時計店の若い方々と一緒に、五月の初旬北風が吹く中、トラックの荷台に乗り桜の苗木を受け取りに駒里まで行ったことを覚えています。受け取った苗木を本町の入り口から今の百年記念塔まで、時計店の方々全員で将来の桜並木を思いながら植樹をしたのです。あれから五五年経っています、大きな桜並木が市民を待っているはずでしたが、残念なことにその桜の木は残っていないようです。図書館近くの坂道の両側に桜の木がありますが、まだ若い木でした。しかし中に三本ほど大きな木があり、あの時植えた木ならいいなあと思っています。今考えると、これが青葉公園との付き合い合いのはじまりです。

当時は青葉公園を神社山と呼んでいましたが、ここが千歳の人々のお花見のメッカだった様で、紅白の幕を張り巡らして酒を酌み交わし、ジンギスカンを食べて騒いでいました。

今は千歳小学校のグラウンドと神社山の間に真々地川が流れていて、山には進入禁止の柵で入る事が出来なくなっていますが、当時は川が無く学校のグラウンドから神社山に直接急な斜面を昇り降りしていたのです。山の上には千歳小学校の屋外の教室があり、子供たちは自然の中で小鳥や虫の声

を聞きながら勉強していたようです。また、そこからの眺めは千歳市内を一望でき、素晴らしいところでした。

昭和四十年頃になり神社山から青葉公園へと市民の認識も変わってきました。そのころは今のスポーツセンター付近に水道局の浄水場跡があり、春日町から水道橋（木の橋）が架かっていましたので、その橋を渡って青葉公園へ往き来をしていました。当時は自然も豊かで、オニヤンマがゆうゆうと飛び、カツコウが鳴き、蝉の音がうるさいほどでした。特に今のなかよし広場は、すり鉢型の相撲場になっており、子供たちには格好の遊び場でした。伸び放題の野草の中には、春、夏、秋と昆虫たちが入れ替わり立ち代り次々と現れます。また付近の樹木には子供たちの大好きなクワガタも樹液を吸いに集まっています。そのころ私は仕事と子育てに追われ、野草への関心もありませんでした。

平成七年、時間的な余裕もでき、青葉公園に出かけることが多くなりました。同八年四月のある日、雪が残っている林の中に黄色の蕾つぼみをつけた植物を見つけたのです。どんな花が咲くのか興味湧き、次の日も出かけ覗いてみましたがまだ咲いていませんでした。数日がたった休日の早朝、見に行くと十字形の黄色い花が咲いていました。早速図鑑で調べると、ナニワズという花で、野草ではなく小低木だったので。

観察していると、夏には赤い実をつけて葉が落ちてしまいました。不思議なこと、秋には緑の葉をつけ、晩秋には黄色の蕾をつけました。自然界の不思議な生態に魅せられ、青葉公園の野草の虜こいつになってしまったのです。この年私は「二〇世紀が終わる今、青葉公園にはどんな野草が生育しているのか調べよう」と思い、平成九年春から本格的に調べてみることにしました。四月、フキノトウからスタート、休日は青葉公園で野草を調べる日々になりました。野草の花が次々と咲き、種名を調べるのが追いつ

かなくなるほどでした。驚いた事に、判明した野草は一五〇種にもなりませんでした。

平成十年、私は青葉公園の野草にどんどのめりこんでいきました。この年には撮影した野草の花は、名前が判明したものだけで二四〇種ほどになりました。写しても名前が確認できないものもありました。それは花の形がそっくりなのに葉の幅が広いとか狭いとか、茎に毛がある、無い、葉の裏に毛があるとか無いとかでも種名が違います。写真だけではどうしても判明出来ないものも多く、次の年に再調査し写真も撮り直しとなります。しかし、もう一度写し直すのがまた楽しみでもあります。

同十一年には何とか自分なりに納得いく写真とデータが揃いました。そのころ写真を撮るのに夢中になっている間に、青葉公園の自然環境がどんどん変化していました。初めに気がついたのは野鳥の声が少なくなったこと、昆虫が減っていることです。元御料林（注参照）の一部であった青葉公園の自然を守り後世に残すことが急務で、それには青葉公園の自然林に素晴らしい野草の花が咲くことを、市民に知ってもらうことが役に立つのではと思いました。

スポーツセンターのロビーに、週に一〇枚ずつ、野草の花が咲く順に展示しました。四季の移り変りを六、七カ月ほどかかり展示しました。また文化センターで開かれた、千歳の自然保護協会主催の「千歳の自然展」にも青葉公園の野草の花の写真を展示し、自然の大切さをPRすることが出来るようになりました。

青葉公園には絶滅危惧種に指定されている植物もありますが、その個体数は年々減っているのが分かりました。それは数カ所で見られ、明らかに販売のために盗掘しているのではないのかと思われまます。心無い人がいることに悲しくなりますが、野草の花を見ていると次第に心が休まるのを感じ

じます。これも青葉公園の持つ癒しの力です。

『青葉公園の植物』

（千歳の自然保護協会発行）

平成十五年、千歳の自然保護協会の理事会で「道立千歳高校が昭和四十一年から四十三年にかけ青葉公園の植物調査した記録による、と今では見かけない植物がかなり記録されています。また地球温暖化などによる植生の変化があると思うので現在の状況を記録しておこう」と斉藤勇作会長から提案があり、調査をすることとなりました。同年秋、植物に詳しい斉藤会長を中心に第一回の調査を開始しました。



写真-1 ツバメオモト（燕万年青）
この株は盗掘され今はありません。

同十六年春からは自然保護協会会員でチームを作り調査を開始しましたが、その矢先に会長が急逝。植物調査の計画が実行不能な状態になってしまい、会員が頭を痛めていた時、故斉藤会長の後輩で札幌市に住む笹原忠司と樹木医の真田勝の協力が得られることとなりました。四月から十一月まで月三回の調査を行い、冬は調査資料のまとめと写真等の確認を行い、写真の有無や、またあっても写真の出来不出来があり、次の年に撮りなおすもの等の確認作業を行いました。同十七年になり、野草の調査は月三回

では十分な調査が出来ないことがわかり、会員との全体調査は月三回、個人的には時間の許す限り最低でも週二回以上は調査することとして、四月からスタート、調査については原則青葉公園の散策路から確認できるものとし、林のなかには踏み込まないことにしています。南側から調査を開



写真-2 青葉公園の植物

始、フキノトウや、キバナノアマナ等から春が来ます。平成十八年一月、調査結果の資料作成にとりかかり、科の分類、種名の打ち込み、写真の貼り付け、そして花の説明と作

業をすすめて、まとめに入りました。その後、市の市民協働事業である「みんなので、ひと・まちづくり基金助成事業」による本の作成費用への助成が認められることとなりましたが、助成金と手持ち資金でもまだ足りず、ユネスコ協会の「草の根基金」からも支援を受け、同十九年二月二十八日発刊することが出来ました。

学校の教材として活用されることを考え、発行部数は一〇〇〇部となりました。各学校関係、公共施設、関係機関など計六五〇部を配布し、残りは観覧会等の資料として貸出用、また当初の計画通り会員の資料として配布をしました。

野草四方山話

野草を観察し種名を調べるうち、和名は植物の形からのものが意外と多く、ダイコンソウ等は葉が大根の葉に似ているから、ルイヨウボタン（類葉牡丹）は名の如く葉が牡丹の葉に似ているから等です。

一般に早春の野草は、冬籠りしていた動物の食用なのか意外と食べられる野草が多いのです。一部毒草もありますが、これは薬草にもなりますの

で、植物は動物にとり大切なものである事はこのことからでも理解できま

す。北海道医療大学の薬用植物園、北方系生態観察園担当の堀田清先生の講義の中で、「もし地球上から植物が消滅したら地球上の全ての生物は絶滅するでしょう」という話を聞き、雑草だ、雑草だとむしりつついた植物は、私たちにとり大切なものだったので。知人が、造園屋に「庭の花が育たないんだけどどうしたら良いですかね」と尋ねたそうです。すると「父さんせつせと毎日草取りをしてるんでないの」といわれ、「そつだよ」と答えたら、「それは駄目だ、砂漠には草は生えないよ、草も生えない土地に花はよく育ちません」といわれたそうです。雑草だ、雑草だと全部抜いては駄目みたいです。

【タンポポ】今私たちの身の回りにはたくさんタンポポが見られます。ほとんどがセイヨウタンポポです。これはヨーロッパ原産の帰化植物で、明治の初年に札幌農学校（今の北海道大学）のブルックス教師が食用のためアメリカから種を持ってきて栽培したのが始まりで、それが野性化したものです。今は全国に広がっていますが、もともと北海道にはエゾタンポポがあります。でも今はセイヨウタンポポに圧倒され、林や山の道ばたに侘しく咲いています。平成十九年に調査をしたところ、青葉公園全体で一カ所、二カ所



写真-3 エゾタンポポ（蝦夷蒲公英）

二株確認しました。たくさんあるように思いますが、青葉公園は広く道の長さでは全ての小道も含め、延べ七・五^キもありますのでエゾタンポポは三〇^ルに一株しかないということです。

開花時期は五月から六月ごろです。セイウタンポポとエゾタンポポの違いは、エゾタンポポが春だけ花が咲き、そして受粉しないと種子ができないのですが、セイウタンポポは受粉しなくても結実し種子をとばし年中花が咲きます。

そんな旺盛な繁殖の力に圧倒され、エゾタンポポはいつの間にか静かな山林の道ばたへと追いやられたのです。

【オオバナノエンレイソウ】

五月、林のながが白く変わるほど咲く花があります。オオバナノエンレイソウ（大花延齡草）です。

種子は主に蟻が運びだします。一年後根だけを出します。二年目で一枚の葉を出し、一枚葉の時代が五・六年、それから三枚の葉になり、さらに八年から一〇年で花をつけることが出来ます。実に一五年から一六年かかってはじめて花をつけます。今咲いている花は一五年以上の年月を過ごしたもののだけなのです。しかも三枚葉になるのが、蒔かれた種子の〇・二^ルと非常に低い確率なのです。

このようなことを思いながら



写真-4 オオバナノエンレイソウ（大花延齡草）

オオバナノエンレイソウを見ると、また別の思いで見ることが出来ます。

山口幸太郎千歳市長が青葉公園を「千歳の宝」と言うのも、公園内のいろいろな自然の不思議な生態を見ると理解できると思います。これは植物だけでなく小鳥や昆虫の世界を含めると、素晴らしいドラマが生まれていることと思います。終わりになりますが、野草を見るときは必ず虫眼鏡を持って観察してください。別の世界を見ることが出来ることでしょう。

《青葉公園は市民の宝です》

（文中敬称略）

御料林 明治元年北海道の山林は全て官有林となる。明治二十三年に官有林の中

より優れた山林を御料林とし、宮内庁・皇室林野局の管理になる。現青葉公園も御料林の一部で皇室林野局の優秀な技術陣により昭和二十二年まで大切に管理されてきた。

参考資料

佐々木昌治 平成十七（二〇〇五）年 『樽前山麓の森林』
中居 正雄 平成十二（二〇〇〇）年 『とまこまいの植物』 苫小牧民報社